



中国がわかるシリーズ 28 海の中国とウイグル、トゥプトの興亡（中）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

均田制に基づく租庸調制は、玄宗の時代に既に破綻しており、安史の乱で収入が途絶えた唐室は、第五琦の献策に基づき、758年、塩の専売法を導入しました。これで一息ついた唐室ではありませんが、河朔三鎮などは、中央政府に納税しなかったため、780年、代宗は、宰相、楊炎の献策により、両税法を施行しました。これは、6月に納める夏税（対象は麦）と11月の冬税（稲、粟）から成る資産比例税でした（荘園や大土地所有を政府が追認）。銭納が原則であり、税率は、毎年の必要経費（支出）に応じて変動する仕組みとなっていました（それまでは歳入に応じて歳出を決めていました）。人頭税・力役を根本原則とする平等主義的な中国古来の税制は、ここに大変革を遂げたのです。

両税法は宋代に完成する財政国家への道を切り開きました。また、両税法の施行に先立って、前述したように、塩の専売が行われ、次いで、酒と茶の専売が始まりました。遊牧民の軍事力の延長にある軍事政権としてスタートした唐は、税収で傭兵を賄う性格の異なる政権へと変貌したのです。

794年、日本は、新しい都（平安京）に遷都しました。王統が、天武系から天智系に変わっており、人心一新の必要があったのです。805年に即位した唐の第11代、憲宗（～820）は、中興の祖と謳われた名君で、宰相、杜佑（制度史「通典」の著者）などを用いて、禁軍（皇帝直轄軍）を強化し、河朔三鎮を除く節度使をほぼ押さえ込みました（代宗時代から、中唐の時代）。この背景には、両税法による国家財政の好転がありました。しかし、仏教に熱心だった憲宗は、晩年、不老長生薬に手を出し人格が蝕まれて宦官に毒殺され、以後、宦官の勢力がさらに増大しました。官僚は官僚で宦官に牛耳られた閉塞感から、牛李の党争（808～846）と呼ばれる派閥争いに明け暮れ、徒に国力を消耗させたのです。